日本簿記学会簿記教育研究部会
＜中間報告＞

「大学における簿記教育の問題点の整理と対策案の提示」

研究メンバー

部会長	：	千葉　啓司（千葉商科大学）
委員	：	青木　孝暢（白鷗大学）
		岩田　俊行（ネットスクール株式会社）
		桑原　正行（駒澤大学）
		竹中　輝幸（全国経理教育協会）
		溝上　達也（松山大学）
		山添　昌彦（松本大学松商短期大学部）
		李　　精（常磐短期大学）
		渡邊　貴士（亜細亜大学短期大学部）
オブザーバー	：	新田　忠誓（帝京大学）

目　次

１．先行研究
２．学生に対するアンケートの立案と実施
２．１．アンケートの立案と実施概要
２．２．アンケート各項目の集計
２．３．問１とのクロス集計
３．大学簿記教育初年度についての大学指導者へのアンケート
３．１．アンケート実施概要
３．２．アンケート結果とコメント
資　料

1. 先行研究

・氏原茂樹他（1999 年）「簿記教育の在り方」『平成８・９年度日本簿記学会簿記教育研究部会最終報告』

・大城建夫（1992 年）「簿記教育の諸問題」『沖大経済論叢』第 17 巻第１号，93-115 頁

・柴　健次（2002 年）「簿記教育における実験的アプローチの有効性」『平成 13・14 年度日本簿記学会簿記教育研究部会』

・武田安弘（1992 年）「わが国おける大学・短期大学の簿記教育の実態と問題点」『平成３・４年度日本簿記学会簿記教育研究部会』

・中野常男編著（2007 年）『複式簿記の構造と機能――過去・現在・未来――』同文舘出版。第Ⅱ部現在簿記－「質問票調査」から見た学界人の複式簿記観－第２章および第３章，23-123 頁

・藤永弘他（1995 年）「大学・短期大学における簿記教育内容と教授法の研究」『平成６・７年度日本簿記学会簿記教育研究部会』

２．学生に対するアンケートの立案と実施

２．１．アンケートの立案と実施概要

当研究部会１年目の中心課題は大学１年次の学生に対するアンケートおよび大学における簿記の指導者に対するアンケートの立案と実施である。学生に対するアンケート項目は、大学生が１年次における簿記教育において、特に簿記の学習項目のどのような点に学習上の困難を感じているかを調査することを主眼として設定されている。人的な要因あるいは教育方法による差異を中和化するために、複数の大学においてアンケートを実施することとした。実施時期は学生に１年間を振り返って考えてもらうため、学年末とした。主として研究部会委員の所属する３大学（駒澤大学、千葉商科大学、松山大学）および２短期大学（亜細亜大学短期大学部、松本大学松商短期大学部）の学生 590 人から有効回答を得ることができた。

アンケートの主眼は前述のように学生の簿記学習上の困難点を洗い出すことにあるが、同時に、高校時代における簿記学習の有無、学習方法の違いにより困難点が相違するかどうかの調査も試みている。２ 年目においては、一定の進度ごとにテストを行い、点数化することにより困難点とその他の項目とで、どの程度習熟度における差が生じるかを調査する予定である。

学生に対してだけでなく、教員に対するアンケートを実施することにより、教員の側で簿記教育上どのような指導項目においてどのような困難が感じられているかを調査し、大学生の意識との一致・不一致を確認する。アンケートの結果、これらの一致点、不一致点が明確となった。そこで、１ 年目においてはこれらの一致点、不一致点を整理することにした。

アンケートの立案および分析に際しては、先行研究を参照した。大学における簿記教育に関する先行研究には、本学会の過年度における簿記教育研究部会の研究を含め、優れたものが多く存在する。本研究部会はこれらの先行研究を受けて、さらに教員及び大学生共に困難であると認識している簿記の学習項目並びに不一致が明確となった点について、最終的には理論的な裏付けのもと具体的ないくつかの打開策を提示しようと試みるものである。

２．２．アンケート各項目の集計

アンケートの質問事項は次のように構成されている。

Ⅰ．これまでの簿記学習について

Ⅱ．簿記学習において難しいと思う点について

ステップ１

基礎編

期中取引編
決算整理編
ステップ２
基礎編
期中取引編
決算整理編

Ⅰは、高校時代および大学１年次までどのような簿記学習をしてきたかを問う設問群である。簿記学習において難しいと思う点とクロス集計することによりその関連性を明らかにする狙いがある。

Ⅱは、簿記学習上の困難点を問う設問群である。ステップ１およびステップ２と２段階になっており、それぞれ基礎編、期中取引編、決算整理編に分かれている。

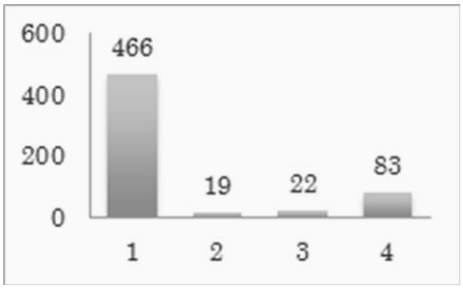
ステップ１は、大学１年次において取り上げられることの多い簿記学習の範囲を網羅的にとりあげ、どの項目に困難を感じているかを調査する設問群となっている。基礎編は複式簿記の基本的仕組みに関連する設問から、期中取引編は企業が期中において行う取引の記帳に関する設問から、そして決算整理編は主要な決算整理事項に関する設問から構成されている。

ステップ２は、基礎編、期中取引編、決算整理編の構成要素のなかから、作問者の側で特に困難であろうと想定した項目に関する設問で構成される。基礎編では貸借対照表と損益計算書の連携、仕訳の規則、勘定への転記を、期中取引編では商品売買および手形取引、そして決算整理編では費用の繰延を取り上げた。

Ⅰ．これまでの簿記学習について

問１　大学に入るまで簿記の勉強をどの程度してきましたか。

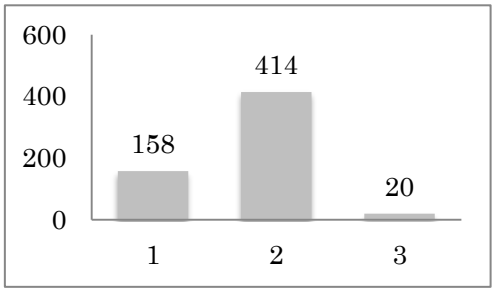
１．大学に入るまで簿記の勉強をしたことがない。
２．高校の時に選択科目として勉強した。
３．高校の時に必修科目として１年間だけ勉強した。
４．高校の時に必修科目を中心として２年以上勉強した。



問１は、大学入学前にどの程度簿記を勉強しているかにより、簿記学習における困難点に違いがあるかどうかを確認するための問である。回答総数 590 人中 466 人(79%)が簿記の初学者であった。

問２　簿記の勉強はどのようにしていますか。

１．簿記処理の理由から考えて勉強する。
２．問題をたくさん解いてできるようにする。
３．その他（具体的に：　　）

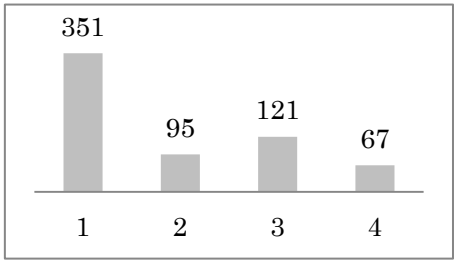


問２は、簿記学習方法の相違から、困難点に相違が生まれるかどうかを確認するための問である。回答者数は590人であるが、選択肢の１および２の双方に○をつけた学生が２人いたため、グラフの総数は592となっている。理由から考えて勉強すると回答した学生数は158人で、590人中27%であった。一方、問題をたくさん解いてできるようにすると解答した学生数は414人で、70%に上っている。

その他が20人いるが、勉強方法としては「友達から教えてもらう」学生が多くなってきているように思われる。

問３　簿記に関してどのような資格を持っていますか（複数回答可）。それぞれ最上級の資格のみ記入してください。（取得時は高校時代の場合は学年を記入し、大学入学後の場合は大学入学後に○をつけてください。）

１．持っていない
２．全商　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）
３．全経　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）
４．日商　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）



１年次の後半ないしは２年次開始直後において、簿記の資格を持っていない学生が351人と全体の59%に上った。

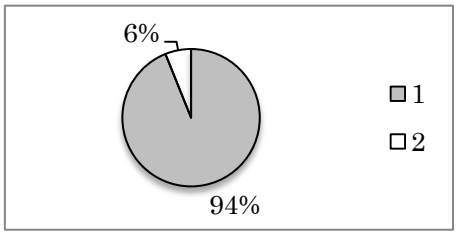
全商の資格を持っているものは全体で95人。そのうち４級保有者が３人であり、いずれも高校時代に取得している。３級取得者は19人でうち２人が大学で取得したと回答している。２級取得者は８人で全員が高校時に取得している。１級取得者は65人でこれも全員が高校時代の取得となっている。

全経の資格保有者は全体で139人である。４級が３人で全員が高校時代の取得。３級取得者は106人でうち103人が大学において取得している。これは、アンケート実施校に全経資格取得に力を入れている大学・短期大学が２校入っていたことによる。２級資格取得者は６人でうち１人が大学において取得している。また、１級取得者は６人で、うち大学において取得したものが５人である。

日商の資格取得者は全体で67人。３級取得者は23人でそのうち20人が大学において取得している。２級取得者は28人で、うち10人が大学において取得している。１級取得者は16人でそのうち７人が大学において取得している。

問４　資格取得は簿記学習の動機付けになると思いますか。

１．は　い　　２．いいえ



この質問に対しては554人が「はい」と回答し、35人が「いいえ」と回答している。1人は両方に○をつけていたので有効回答から除外した。いかなる検定試験でもそれなりの試験対策が必要となり、それが必ずしも簿記の修得に有用ではないとの見解もあるが、学生は簿記学習の動機付けとして資格取得のための勉強が有効であると考えている様子がうかがえる。

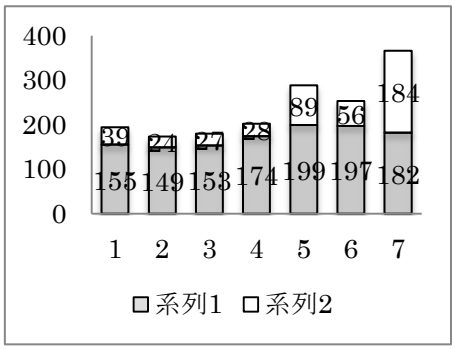
Ⅱ．簿記学習において難しいと思う点について

ステップ１

（基礎編）

問５　簿記学習において、難しかったと思う項目に○をつけて下さい。その中でも最も難しかったと思うもの１つに◎をつけて下さい。

（　　）１　複式簿記の仕組み
（　　）２　貸借対照表の見方（資産、負債、純資産の意味）
（　　）３　損益計算書の見方（収益、費用の意味）
（　　）４　利益計算の仕組み
（　　）５　仕訳および勘定記入規則
（　　）６　帳簿の仕組み
（　　）７　決算



系列１が○の難しかった項目、系列２が◎の最も難しかった項目に対する回答数を示している。○の数では仕訳および勘定記入規則が最も多くなっている。これは簿記学習のかなり初期の段階で学生が簿記の仕組みの学習に困難を感じている現実を示していると言えよう。◎は決算が最も多くなっている。これは、決算整理に関する多くの項目がこの中に含まれるためであると考えられるが、決算整理に関しては全般的に難しさを感じる学生が多いことを示している。

（期中取引編）

問６　簿記学習において、難しかったと思う項目に○をつけて下さい（複数選択可）。その中でも最も難しかったと考えるもの１つに◎をつけて下さい。また、○または◎をつけた項目についてその理由をⓐⓑⓒの中から選んでください（複数選択可）。

（　　）１　現金・預金（小切手を含む）取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　　）２　商品売買取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

現金預金および商品売買取引については、困難を感じる学生は比較的少なかった。現金預金取引には85人（14%）、商品売買取引には110人（19%）が○の難しかった項目として回答している。最も難しい項目としてあげている学生は、現金預金取引が10人（２%）、商品売買取引が19人（３%）とかなり少数である。

（　　）３　手形取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

手形取引となると、難しかった項目とした学生は245人（42%）、最も難しい項目とした学生は118人（20%）といずれも最大値となっている。○とした学生のうちⓐ取引の仕組みが難しかったと回答した学生は122人、ⓑ仕訳の意味がよく分からなかったと回答した学生は100人、ⓒ計算の仕方がよく分からなかったとした学生は51人いた（複数回答）。◎とした学生のうち、ⓐを選択した学生は79人、ⓑを選択した学生は41人、ⓒを選択した学生は13人であった。いずれも取引の仕組みを最大の困難点と考えている様子がうかがえる。手形に学生が困難を感じていることは当委員会としてもあらかじめ予測していたので、アンケートの別の項目に対する回答とともに詳細に分析を進めていきたい。

（　　）４　有価証券取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

有価証券取引に○をつけた学生は219人（37%）、◎をつけた学生は93人（16%）であった。○を

つけた学生219人の半数近くの103人が取引の仕組みが難しかったと回答している。仕訳の意味が分からないとした学生は77人、計算の仕方が分からないとした学生は72人であった。◎をつけた93人中のやはり半数近くの45人が取引の仕組みが難しかったと回答している。また、仕訳の意味が分からないとした学生も多く、40人であった。計算の仕方が分からないとした学生は29人で、若干少なめであった。学生は取引の仕組みに学習上の困難を感じていることが見て取れる。

（　）5　固定資産取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

固定資産取引に○をつけた学生は218人、◎は43人であった。○をつけた学生218人中88人が取引の仕組みを、92人が仕訳の意味を、そして76人が計算の仕方を困難としている。また、◎をつけた学生43人中21人が取引の仕組みを、21人が仕訳の意味を、そして15人が計算の仕方を困難としている。当委員会の想定する期中取引としての固定資産取引は、土地などの購入および売却取引であった。アンケートも減価償却は決算整理項目の中で取り上げている。土地等の購入および売却取引自体は付随費用の問題、そして売却損益の計上という2点に学習上の困難があると思われるが、手形などと比べて取引の仕組み自体は単純である。にもかかわらず、多くの学生が困難を感じた項目として回答しているのは、期中取引の段階で減価償却を取り上げていることが多いことに起因していると、当委員会では判断した。今回のアンケートで決算整理項目の1つとしての減価償却に、多くの学生が困難を感じていると回答したこととも整合する。減価償却に困難を感じていると解釈すると、減価償却そのものの意味および直接法・間接法といった仕訳の仕方に特に困難を感じている学生が多いことが分かる。

（　）6　その他の債権・債務取引

難しいと思った理由は何ですか。

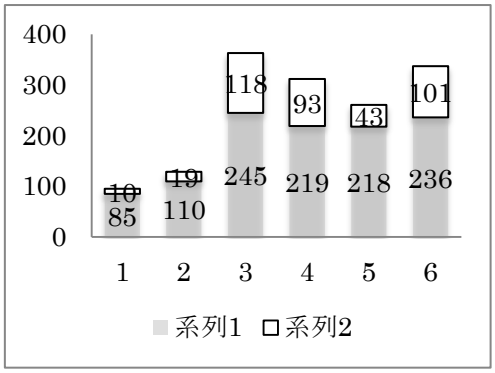
（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

学生が学習上の困難を感じる点として、手形取引に引き続き多かったのがこの項目である。○をつけた学生は236人、◎をつけた学生は101人である。合わせると337人（57%）の学生が困難を感じていることになる。

○をつけた学生236人のうち、125人が取引の仕組みを、83人が仕訳の意味を、59人が計算の仕方を困難としている。◎をつけた学生101人のうち、50人が取引の仕組みを、35人が仕訳の意味を、そして37人が計算の仕方を困難としている。この項目においても取引の仕組みに学習上の困難を感じている学生が多いことが示されている。



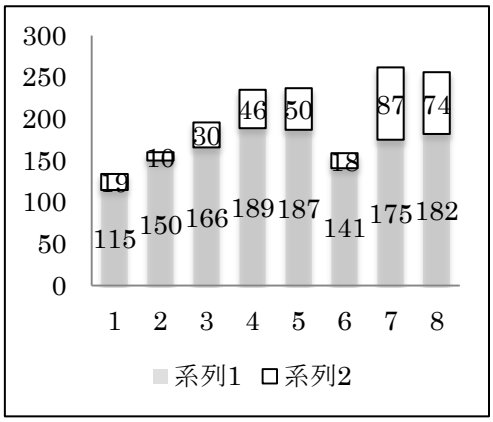
1　現金預金取引
2　商品売買取引
3　手形取引
4　有価証券取引
5　固定資産取引
6　その他の債権・債務取引
　　系列１：○（困難）
　　系列２：◎（最も困難）

問６に対するアンケートの回答をグラフにすると上のようにまとめられる。困難な点についてはいずれの項目においても取引の仕組みをあげる学生が多く、取引の仕組みを丁寧に説明することの重要性が浮かび上がってくる。

（決算整理編）

問７　簿記学習において、難しかったと思う項目に○をつけて下さい（複数選択可）。その中でも最も難しかったと思うもの１つに◎をつけて下さい。

（　　）１　売上原価の算定
（　　）２　貸倒引当金
（　　）３　有価証券の評価替え
（　　）４　減価償却
（　　）５　費用・収益の見越・繰延
（　　）６　引出金の整理
（　　）７　８桁精算表
（　　）８　損益計算書・貸借対照表の作成



1　売上原価の算定
2　貸倒引当金
3　有価証券の評価替え
4　減価償却
5　費用・収益の見越・繰延
6　引出金の整理
7　８桁精算表
8　損益計算書・貸借対照表の作成
　　系列１：○（困難）
　　系列２：◎（最も困難）

決算に関する項目は、いずれの項目も少ないとは言えないが、相対的に１ 売上原価の算定、６ 引出金の整理が少ない。引出金の整理は、日商の簿記検定では出題頻度が低いため授業において取り上げないことも多いと考えられる。しかしながら、売上原価の算定については全ての授業で取り上げられている。時間をかけて教えることが必要と考えられる項目が、最も○の人数が少ないのは意外であった（○と◎の総計も同様）。意味を理解せずに単純に仕訳を覚えることで済ましていることも考えられるので、今年度実施予定（一部実施済み）である授業中の小テストにおいて理解度を確認していきたい。

反対に意外なほど多かったのが減価償却である。〇の数は189人と最大を記録している。期中取引としての固定資産取引の箇所でも指摘したが、我々は減価償却そのものの意味の修得に困難を感じている学生が多いのではないかと考える。

費用・収益の見越・繰延については〇が187人、◎が50人、総計で237人となった。総合問題でもある8桁精算表、損益計算書・貸借対照表の作成を除くと総計で最大数となる。この項目については、授業でも時間をかけることが多く教員側の意識と学生アンケートの結果は一致していると言える。

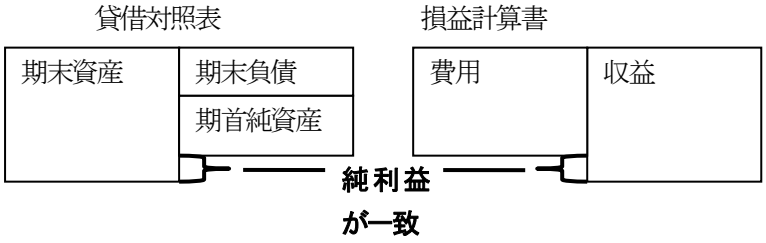
〇および◎の総数で最も多かった（262人）のが7 の8桁精算表である。8桁精算表は決算整理項目が全て含まれているため、難易度が高くなることが見込まれたが、その通りの結果となった。

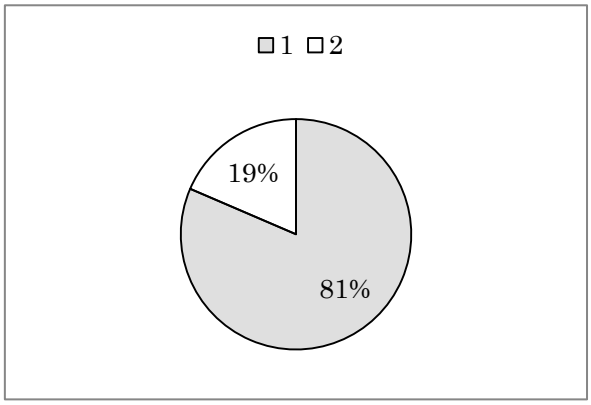
ステップ2

（基礎編）

問8　貸借対照表と損益計算書に関する下記の仕組みを理解していますか？

1．理解している。　　2．理解していない。





問8に対する有効回答数は577人であった。うち470人が理解していると回答し、107人が理解していないと回答した。20%程度の学生が複式簿記の基本構造を理解していないということになる。

問9　問8で理解していないと答えた人は、特にどこが分からなかったのですか。具体的に書いて下さい。

理解していないと回答した107人のうち問9（記述）に回答した学生は20人であった。そのうち15 人は全く分からないと回答している。他の回答例としては、「費用と負債を混同する。」「項目の分け方が曖昧。」「完全に分かっているとは言えない。」といったものがあげられる。

問10　帳簿価額¥10,000の有価証券を¥12,000で売却し、代金を現金で受け取ったという取引は、次のように分解できます。

１．現金（資産）¥12,000の増加

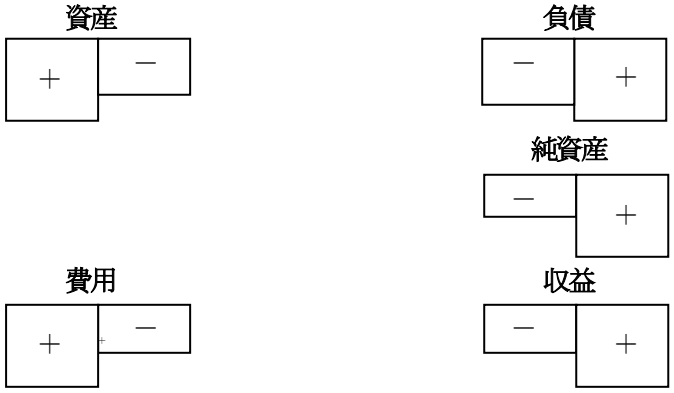
２．有価証券（資産）¥10,000の減少

３．売却益（収益）¥2,000の発生

分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

記述を要請するアンケート項目には全体的に回答数が少なかった。分かりづらい点につき回答した学生数は57人であった。うち、仕訳の貸方、つまり有価証券が¥10,000減って、有価証券売却益が¥20,000生じる点に関して理解が不十分であるといった回答が22人、増加、減少、発生、帳簿価額または有価証券といった用語が分からないといった回答が9人あった。

問11　勘定記入のルールは次のようになります。



分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

分かりづらい点を指摘した回答は49人。純資産に関連するものが多かった。純資産自体がよく分からないという回答が6人、資産と純資産を混同するという回答が6人、純資産と収益が区別できないという回答が2人、純資産と負債が区別できないとする回答が1人あった。この他、資産と収益、負債と費用の区別がつかないとする回答が1人あった。このほか、具体的な勘定科目が書いてないとよく分からないという回答も4人あった。

問12　次の仕訳は下記の通りの勘定記入となります。

仕訳　4/1　（借）現　金　　80,000（貸）有価証券100,000

有価証券売却損　20,000

勘定

現　金

4/1	有価証券	80,000			

有価証券

			4/1	諸口	100,000

有価証券売却損

4/1	有価証券	20,000			

分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

分かりづらい点を指摘した回答数は 37 であった。うち 18 人が諸口の用い方に関連していた。

（期中取引編）

商品売買取引

問 13　次の取引は分記法と三分法でそれぞれ下記のような仕訳となります。

①当社は 1 個￥1,000 の商品を 10 個掛で仕入れた。

②当社は、上記商品のうち 8 個を 1 個￥1,500 で掛け売りした。

分記法

①（借）商品 10,000（貸）買掛金 10,000

②（借）売掛金 12,000（貸）商品 8,000

商品販売益 4,000

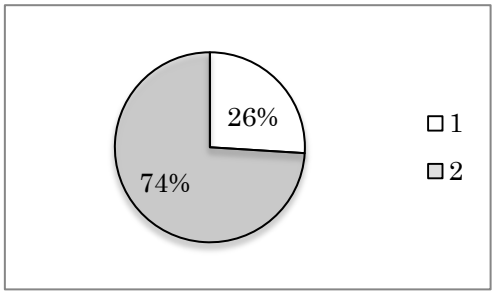
三分法

①（借）仕入　 10,000（貸）買掛金 10,000

②（借）売掛金 12,000（貸）　売　上 12,000

分記法と三分法のどちらが理解しやすいですか。

1　分記法　　2　三分法



当設問に対する有効回答者数は 558 人。うち 145 人（26%）が分記法と、413 人（74%）が三分法と回答した。決算整理の煩わしさが設問から省略されているため、三分法を選択した学生が多くなった可能性も委員会で指摘された。

問 14　次の取引は下記のような仕訳となります。

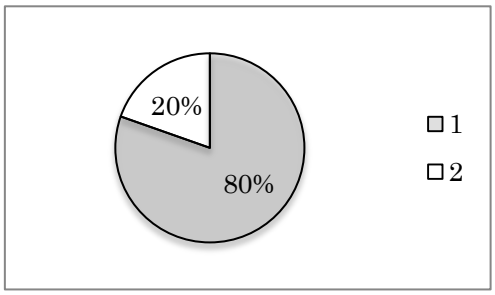
当社は、商品￥100,000 を掛で仕入れ、引取運賃￥10,000 は現金で支払った。

（借）　仕　入 110,000（貸）買掛金 100,000

現　金　10,000

正解の仕訳を知っていましたか。

1．知っていた。　　2．知らなかった。



付随費用を商品の取得原価に含めることを知っているか否かを問う設問である。有効回答者数 566 人中 455 名（80%）が知っていると回答した。正解が設問に示されているため、知っていたとする回答の割合が高くなったと考えられる。特に初学者はこの点を間違えやすいとの実感が当委員会委員の間にあるので、小テストなどにより学生の実際の習熟度を確認する必要があろう。

手形取引

問 15　次の取引について、各商店の仕訳は次のようになります。

10 月 1 日、東京商店は、大阪商店から商品￥100,000 を仕入れ、代金の支払として、支払期日 12 月 1 日の約束手形￥100,000 を振り出して大阪商店に渡した。

東京商店

（借）仕　　入 100,000（貸）支払手形 100,000

大阪商店

（借）受取手形 100,000（貸）売　　上 100,000

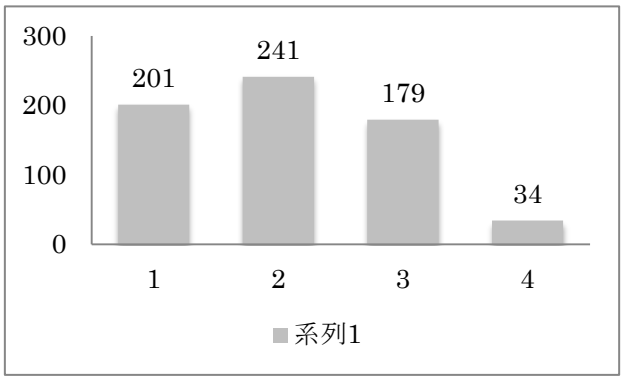
これらの仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　　）1　約束手形の仕組み

（　　）2　約束手形なのに支払手形とか受取手形と仕訳する点

（　　）3　振出という用語が小切手と同じで間違いやすい

（　　）4　その他（具体的に　　）



約束手形については、有効回答者数は 494 人であった。494 人のうち、2 約束手形なのに支払手形、受取手形勘定を用いる点を難しいと回答した学生が最も多く 241 人となった。これは 494 人中 49%に相当する。3 振出しという用語が小切手と同じで間違えやすいとした回答者数は 179 人である。2 と 3 ともに選択した学生が 71 人いるので、349（241＋179－71）人（全体 590 人に対して 59%）が勘定科目名ないし用語の問題に困難を感じていると言える。反対に、取引の仕組みに困難を感じている学生は全体 590 人に対して 201 人（34%）と相対的に低い数字となっている。

問16　次の取引について各店の仕訳は以下のようになります。

名古屋商店は、福岡商店に対する買掛金¥200,000の支払のため、売掛金¥500,000のある仙台商店の引き受けを得て、同店宛ての為替手形¥200,000を振り出し、福岡商店に渡した。

名古屋商店（振出人）

（借）買掛金200,000（貸）売掛金200,000

福岡商店（受取人）

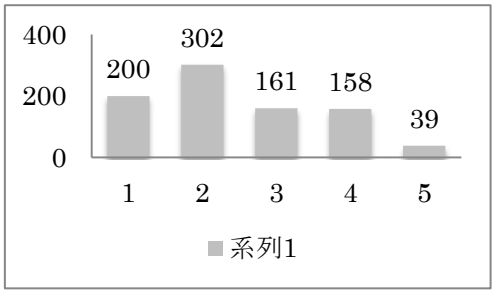
（借）受取手形200,000（貸）売掛金200,000

仙台商店（引受人、支払人、名宛人）

（借）買掛金200,000（貸）支払手形200,000

これらの仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　）１　為替手形の仕組み
（　）２　取引が複雑で、どの商店が振出人、受取人、引受人なのかわかりにくい
（　）３　為替手形なのに支払手形とか受取手形という勘定を用いる
（　）４　為替手形を振り出した商店が支払手形とか受取手形という勘定を使わない。
（　）５　その他（具体的に：　　）



問16に対する有効回答者数は519人であった。うち200人が為替手形の仕組みに、302人が取引が複雑でどの商店が振出人、受取人、引受人か分からない点に困難を感じていた。この2つは取引の内容の複雑性に関連した学習上の困難であると言える。重複回答者は106人なので、396人（全体比67%）が為替手形取引の複雑性に困難を感じていることになる。

これに対して、３および４の選択肢で問われる勘定科目や専門用語に関連する困難を感じる学生は相対的に少ないことが見て取れる。３および４の重複回答者は83人であるので、236人（161＋158－83）が簿記の記録方法に関して困難を感じていることになる。全体比（対590人）では40%となる。

（決算整理編）

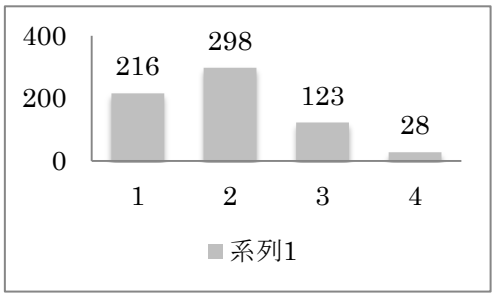
問17　次のような場合、以下のような決算整理仕訳が必要となります。

当社は10月1日に向こう1年分の保険料¥120,000を現金で支払っていたが、本日12月31日に決算を迎え、次年度分を繰り延べることとした。

（借）前払保険料90,000（貸）保険料90,000

この仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　）１　繰り延べるという意味がよく分からない
（　）２　今年の３ヶ月分と来年の９ヶ月分のどちらで仕訳するのか混乱する
（　）３　そもそも何でこの仕訳をするのか意味が分からない。
（　）４　その他（具体的に：　　）



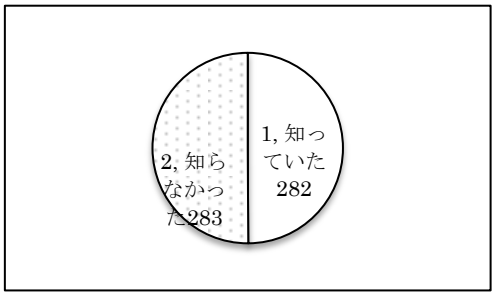
問 17 に対する有効回答者数は 476 人であった。最も多い回答が２の「今年の 3 ヶ月分と来年の 9 ヶ月分のどちらで仕訳するのか混乱する」で 298 名、全体比（対 590 人）51%に上った。また、1「繰り延べるという意味がよく分からない」とする回答した学生も 216 人（全体比 37%）と少なくない。当設問で採り上げた問題は費用の繰延に関する基本的問題であるが、こうした基本的問題に対しても半数以上の学生が困難を感じていた。

問 18　問 17 の設問の翌年１月１日には次のような仕訳が必要になります。

（借）保険料 90,000（貸）前払保険料 90,000

この仕訳が必要であることを知っていましたか。

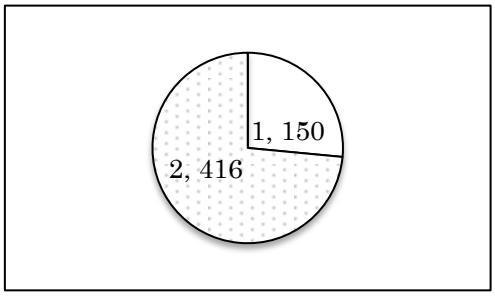
1　知っていた　　2　知らなかった



問 18 に対する有効回答者数は 565 人であった。うちおよそ半数の 283 人が再振替仕訳を知らないと回答している。アンケートは委員が担当している授業以外でも実施したため、現在までのところ確認が取れていないが、再振替仕訳を授業で説明していない場合も想定できる。そのため単純に数値を評価することはできないが、アンケートを実施した時期が決算を学習する後期の期末であることを考えると、知らないという回答は思いの外多いように感じられる。

問 19　問 18 における仕訳がなぜ必要なのか、説明できますか。

1　できる　　2　できない



問 19 に対する有効回答者数は 566 人である。問 18 に対する有効回答者数は 565 人であったが、1 名は問 19 にのみできないと回答しており、他は全て重複している。問 18 で再振替仕訳を知っていたと回答した 282 人のうちその仕訳の意味を説明できる学生が 150 人（53%）に過ぎないという結果が

出た。回答者数全体の590人に対しては25%である。このことから、費用・収益の見越・繰延について困難と感じている学生が比較的多く、さらに仕訳の意味から理解する学生は少数派であることが分かる。

２．３．問１とのクロス集計

まず、問１と問２の勉強方法との関連をみた。クロス集計の結果は次の表に示される。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
簿記処理の理由から考える	126人（ 27%）	4人（ 21%）	5人（ 23%）	23人（ 28%）
問題をたくさん解く	320人（ 69%）	15人（ 79%）	16人（ 73%）	63人（ 76%）
その他	20人（ 4%）	0	1人（ 5%）	0
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者とは、問１で大学に入るまで簿記の勉強をしていないと回答した学生を示している。初学者の27%126人が理由から考えて簿記を学習すると答えている。高校で必修として２年以上簿記を学習した学生の中で３人ほどは理由から考え、問題もたくさん解くという回答をした。この３人については有効回答としたため単純に集計すると86人になるが、合計欄は83人とした。サンプル数が少ない高校で選択科目として勉強した者、必修で１年間勉強した者については若干理由から考えるという回答の比率が少なめに出ているが、概ねどのグループも理由から考える30%前後、問題をたくさん解く70%前後となっている。

問３はクロス集計に適さず、また、問４はほとんどの学生（94%）が資格取得は簿記学習の動機付けになると回答しているため、問１とのクロス集計は行わなかった。

アンケート区分Ⅱの簿記学習において難しいと思う点について、初学者と高校で簿記を勉強した者とで異なる傾向があるかどうかをクロス集計で確認した。

まず、ステップ１の基礎編問５の各項目とクロス集計をとった。

問５の選択肢１複式簿記に○ないし◎をつけた学生と、そうでない学生とのクロス集計は次のとおりである。この項目については経験者も初学者も大きな差はみられない。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
複式簿記の仕組みが難しい	155人（ 33%）	5人（ 26%）	7人（ 32%）	27人（ 33%）
そうは思わない	311人（ 67%）	14人（ 74%）	15人（ 68%）	56人（ 67%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢２貸借対照表の見方に○ないし◎をつけた学生とそうでない学生とのクロス集計は次のとおりである。○ないし◎をつけた学生に比率は初学者が高く、高校で簿記を学習した期間が長いほど少なくなっている。簿記の学習を進めることにより、資産、負債、純資産の項目などに対する理解が進むためと考えられる。統計的な有意性を調べることにしたい。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
貸借対照表の見方が難しい	154人（ 33%）	4人（ 21%）	3人（ 14%）	11人（ 13%）
そうは思わない	312人（ 67%）	15人（ 79%）	19人（ 86%）	72人（ 87%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢３損益計算書の見方に○ないし◎をつけた学生とそうでない学生とのクロス集計は次のとおりである。選択肢２と同様の傾向が見られる。これについても統計的な有意性を確認したい。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
損益計算書の見方が難しい	159人（ 34%）	7人（ 37%）	3人（ 14%）	11人（ 13%）
そうは思わない	307人（ 66%）	12人（ 63%）	19人（ 86%）	72人（ 87%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢４利益計算の仕組みに○ないし◎をつけた学生とそうでない学生とのクロス集計は次のとお

りである。利益計算の仕組みでは、難しさを感じる学生の比率は、高校時代に必修で１年間学習した学生の比率が低いが、初学者と経験者で大きな差がないように思われる。利益計算の仕組みは高校での学習経験によりなかなか理解が容易にならない項目であるかもしれない。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
損益計算書の見方が難しい	159人（ 34%）	7人（ 37%）	3人（ 14%）	11人（ 13%）
そうは思わない	307人（ 66%）	12人（ 63%）	19人（ 86%）	72人（ 87%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢５の仕訳・勘定記入規則に○ないし◎をつけた学生とそうでない学生とのクロス集計は次のとおりである。困難を感じる初学者の比率は 52%であるのに対して、経験者は 30%～40%程度と相対的に低くなっている。初学者とはいえ、1 年間学習した者でも半数以上が困難を感じているということは、１年間での指導では簿記の基本を学生に修得させるには足りないということかもしれない。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
仕訳・勘定記入規則が難しい	243人（ 52%）	6人（ 32%）	9人（ 41%）	30人（ 36%）
そうは思わない	223人（ 48%）	13人（ 68%）	13人（ 59%）	53人（ 64%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢６についてのクロス集計の結果は次のとおりである。初学者と経験者で大きな差はみられない。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
帳簿の仕組みが難しい	207人（ 44%）	7人（ 37%）	7人（ 32%）	32人（ 39%）
そうは思わない	259人（ 56%）	12人（ 63%）	15人（ 68%）	51人（ 61%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

選択肢７決算についてのクロス集計の結果は次のとおりである。初学者と経験者で大きな差はみられない。大学１年次における決算整理事項は、それほど難易度の高いものを扱わない。経験者は同じことをやっているはずであるが、なかなか難しいと思う学生の比率は減っていない。決算は総合的な問題であることが影響しているかもしれない。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
決算が難しい	293人（ 63%）	12人（ 63%）	13人（ 59%）	48人（ 58%）
そうは思わない	173人（ 37%）	7人（ 37%）	9人（ 41%）	35人（ 42%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

期中取引編の問６は設問がやや複雑で、○ないし◎をつけるだけでなく、難しいと思った理由についても選択肢に含んでいる。今回の中間報告では○と◎のいずれかをつけた者をとそうでないものとに分けて集計した。○と◎の関連については最終報告に向けて検討する。

問６の１および２についてのクロス集計は次のようになる。

現金・預金取引とのクロス集計

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
現金・預金取引が難しい	80人（ 17%）	1人（ 5%）	2人（ 9%）	2人（ 2%）
そうは思わない	385人（ 83%）	18人（ 95%）	20人（ 91%）	81人（ 98%）
合　　計	465人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

商品売買取引とのクロス集計

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
商品売買取引が難しい	95人（ 20%）	2人（ 11%）	2人（ 9%）	11人（ 13%）
そうは思わない	371人（ 80%）	17人（ 89%）	20人（ 91%）	72人（ 87%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

いずれも初学者でも難しいと回答した学生の比率は20%程度と相対的に低く、経験者はさらに低く

なっている。難しいと思った理由としては仕訳の意味がよく分からないとする回答が多く、１の現金預金取引で 41 人、２の商品売買取引で 51 人であった。簿記学習の初期の段階で取り扱うこれらの項目につき、困難を感じる学生は取引を仕訳として記録する簿記の仕組み自体の修得に苦労していることが見て取れる。

問６の３手形取引についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
手形取引が難しい	302人（ 65%）	10人（ 52%）	11人（ 50%）	40人（ 48%）
そうは思わない	164人（ 35%）	9人（ 48%）	11人（ 50%）	43人（ 52%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者の 60%以上が手形取引に難しさを感じている。経験者も簿記学習が長い学生ほど少なくなってはいるが、それでも高校時代２年以上学習した者で 48%と半数近くが困難を感じている。

困難を感じる理由としては、取引の仕組みが難しいとする者 201 人、仕訳の意味がよく分からないとする者 141 人、計算の仕方がよく分からないとする者 64 人であった。手形についてはこのように取引の仕組みに難しさを感じる学生が多いという結果が出た。この点についてはステップ２の手形に関する設問に対する回答をさらに分析して、学生の傾向を抽出し提言につなげたい。

問６の４有価証券取引についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
有価証券取引が難しい	260人（ 56%）	10人（ 53%）	10人（ 45%）	32人（ 39%）
そうは思わない	206人（ 44%）	9人（ 47%）	12人（ 55%）	51人（ 61%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者から経験が長くなるにつれ困難を感じる学生が減少している典型的な項目と言える。有意な相違があるかどうか検証したい。

問６の５固定資産取引についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
固定資産取引が難しい	221人（ 47%）	11人（ 58%）	13人（ 59%）	16人（ 19%）
そうは思わない	245人（ 53%）	8人（ 42%）	9人（ 40%）	67人（ 81%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

一貫した傾向は見られなかった。ただ、高校で 2 年以上学習経験がある学生は、相対的に固定資産取引に困難を感じていないと言える。

問６の６その他の債権・債務取引についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
その他の債権・債務取引が難しい	254人（ 55%）	11人（ 58%）	11人（ 50%）	63人（ 76%）
そうは思わない	212人（ 45%）	8人（ 42%）	11人（ 50%）	20人（ 24%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者、経験者を問わず全体的に高い比率を示している。また、高校で 2 年以上学習経験のある学生のグループにおいて最も困難を感じる比率が高くなっている。高校での学習経験が理解の手助けになっていないのか、経験者には大学においてより難しい内容を教えているからだろうか。原因を調査したい。

決算整理編の問７については、単純集計の解説の際にも数値は示しているが、全体的に期中取引に比べて困難を示す学生に比率は低くなっている。問６同様○と◎のいずれかを示した者と、そうでないものとに分けて集計したが、前者の比率が 50%を超える項目はほとんどなかった。

問６の１売上原価についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
売上原価の算定が難しい	103人（ 22%）	5人（ 26%）	6人（ 27%）	20人（ 24%）
そうは思わない	363人（ 78%）	14人（ 74%）	16人（ 73%）	63人（ 76%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問７の項目中、初学者では困難を感じる学生の比率が最も低い項目であった。経験者との相違もほとんどない。逆に経験が長ければ低くなるというものでもないと言える。大学指導者に対するアンケートでは当該項目に重点を置くという回答が多かったのと対照的な結果が示された。この点については最終報告に向けてさらに検討を深めたい。

問７の２貸倒引当金、３有価証券の評価替え、４減価償却についてのクロス集計は次のとおりである。

貸倒引当金についてのクロス集計

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
貸倒引当金が難しい	151人（ 32%）	2人（ 11%）	4人（ 18%）	3人（ 4%）
そうは思わない	315人（ 68%）	17人（ 89%）	18人（ 82%）	80人（ 96%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

有価証券の評価替えについてのクロス集計

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
有価証券の評価替えが難しい	176人（ 38%）	5人（ 26%）	5人（ 23%）	10人（ 12%）
そうは思わない	290人（ 62%）	12人（ 74%）	17人（ 77%）	73人（ 88%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

減価償却についてのクロス集計

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
減価償却が難しい	207人（ 44%）	9人（ 47%）	7人（ 32%）	12人（ 14%）
そうは思わない	259人（ 56%）	10人（ 53%）	15人（ 68%）	71人（ 86%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

いずれの項目も一部例外を除き、概ね高校時代に勉強を長くしているほど困難を感じる比率が低くなっている。高校での簿記教育と大学での簿記教育では授業時間等の相違があり単純に比較はできないが、初学者でも２年次以降簿記の学習を進めればこれらの困難を解消する可能性は高いと見込まれる。

問７の５見越・繰延についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
見越・繰延が難しい	189人（ 41%）	8人（ 42%）	10人（ 45%）	30人（ 36%）
そうは思わない	277人（ 59%）	11人（ 58%）	12人（ 55%）	53人（ 64%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者から経験者全般までおおよそ40%の学生が困難を感じている。経験年数の相違が学習効果に結びついていない典型的な項目の１つである。最終報告までに対策を検討したい。

問７の６引出金についてのクロス集計は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
引出金が難しい	139人（ 30%）	3人（ 11%）	4人（ 18%）	13人（ 16%）
そうは思わない	327人（ 70%）	16人（ 89%）	18人（ 82%）	70人（ 84%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初心者は若干戸惑うが、その後すぐに修得できる項目と解釈できる。

問７の７精算表および８財務諸表についてのクロス集計は次のとおりである。

７精算表

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
精算表が難しい	215人（ 46%）	8人（ 42%）	9人（ 41%）	30人（ 36%）
そうは思わない	251人（ 36%）	11人（ 58%）	13人（ 59%）	53人（ 64%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

８財務諸表

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
財務諸表が難しい	200人（ 43%）	10人（ 53%）	12人（ 55%）	24人（ 29%）
そうは思わない	266人（ 57%）	9人（ 47%）	10人（ 45%）	59人（ 71%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

７の精算表は、クロス集計上簿記の学習経験が長いほど困難に感じる学生の比率は低くなっている。８の財務諸表については、初学者ではここまで進めないこともあるからか、困難と感じる学生の比率が低くなっている。また、経験者でも２年以上学習経験があって初めて比率が下がっている。財務諸表作成の習得には時間がかかることが多いということかもしれない。

次にアンケート項目ステップ２についてクロス集計を行った。ステップ２は前述の通り、ステップ１で取り上げた項目のうち、当委員会が難しいと想定したいくつかの項目につき、より詳しくその原因を探るための設問である。しかしながら残念なことに記述を要請する設問が多かったからか、ステップ２の基礎編に対する回答数は他の項目に比べて少なかった。そのため、クロス集計からも有意義な結果が得られなかったので、ここでは説明を省略し、ステップ２の期中取引編についてのクロス集計結果を以下に示すことにする。

問13は分記法と三分法のいずれが理解しやすいかを問う設問である。学生の簿記学習経験を問う問１とのクロス集計の結果は次のとおりである。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
分記法がわかりやすい	129人（ 28%）	2人（ 11%）	2人（ 9%）	12人（ 14%）
三分法がわかりやすい	337人（ 72%）	17人（ 89%）	20人（ 91%）	71人（ 86%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者では分記法の方がわかりやすいとする学生に比率が他と比べて若干高くなっている。三分法に基づく売上原価の算定については先に見たように初学者経験者を問わずおおよそ 20%程度の学生が困難を感じている。この数値は他の項目に比べて相対的に低いので、最初の段階から三分法を教える根拠にもなり得る。

問14付随費用処理の理解とのクロス集計は次のようになる。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
付随費用処理を知っている	337人（ 72%）	18人（ 95%）	19人（ 86%）	81人（ 98%）
知らない	128人（ 27%）	1人（ 5%）	3人（ 14%）	2人（ 2%）
合　　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

初学者で72%、経験者で90%前後が適切な処理を知っていると回答している。ただし、１年を経過した時点での72%という数値を低いとみるか高いとみるかは判断が分かれるところであろう。

問15は約束手形取引、問16は為替手形取引に関する設問である。これについては概ね各設問の各項目につき、簿記学習の経験が長いほど困難を感じる学生が少ないという結果が出た。クロス集計の結果を表で示しておく。なお、その他という選択肢への回答は回答数自体が少ない上にその内容が多

岐にわたるため、クロス集計からは除外している。

問15の1

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
約束手形の仕組みが難しい	173人（ 37%）	4人（ 21%）	4人（ 18%）	20人（ 24%）
そうは思わない	292人（ 63%）	15人（ 79%）	18人（ 82%）	63人（ 76%）
合　計	465人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問15の2

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
仕訳の仕方がが難しい	207人（ 44%）	8人（ 42%）	7人（ 32%）	19人（ 23%）
そうは思わない	259人（ 56%）	7人（ 37%）	15人（ 68%）	64人（ 77%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問15の3

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
振出という用語が紛らわしい	152人（ 33%）	5人（ 26%）	6人（ 27%）	16人（ 19%）
そうは思わない	314人（ 67%）	14人（ 74%）	16人（ 73%）	67人（ 81%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問16の1

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
為替手形の仕組みが難しい	167人（ 36%）	4人（ 21%）	3人（ 14%）	26人（ 31%）
そうは思わない	299人（ 64%）	15人（ 79%）	19人（ 86%）	57人（ 69%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問16の2

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
振出人、受取人、引受人の区別が難しい	245人（ 53%）	13人（ 68%）	11人（ 50%）	33人（ 40%）
そうは思わない	220人（ 47%）	6人（ 32%）	11人（ 50%）	50人（ 60%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問16の3

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
仕訳の仕方が難しい	139人（ 30%）	1人（ 5%）	5人（ 23%）	16人（ 19%）
そうは思わない	327人（ 70%）	18人（ 95%）	17人（ 77%）	67人（ 81%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問16の4

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修2年以上
振り出した商店の仕訳が難しい	137人（ 29%）	3人（ 16%）	4人（ 18%）	14人（ 17%）
そうは思わない	329人（ 71%）	16人（ 84%）	18人（ 82%）	69人（ 83%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

問16の2為替手形の複雑性については、2年以上の学習経験を持つ者を除くと半数以上が困難を感じている。高校時代に1年勉強した経験を持っていても為替手形については困難を感じる者が多いということである。為替手形の学習はある程度簿記学習の経験を積んでからの方が、理解が早いかもしれない。

問17から問19までは費用の繰延に関する設問である。問17は費用を繰り延べる決算整理仕訳の理解を問う設問である。クロス集計の結果は次のとおり。その他という選択肢は集計から除外してい

る。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
繰り延べるという意味が分からない	196人（ 42%）	4人（ 21%）	7人（ 32%）	9人（ 11%）
今年分と来年分を混同する	240人（ 52%）	12人（ 63%）	11人（ 50%）	35人（ 42%）
そもそもこの仕訳の意味が分からない	115人（ 25%）	2人（ 11%）	2人（ 9%）	4人（ 5%）
総　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

カッコ内のパーセントはそれぞれの縦合計 466 人、19 人、22 人、83 人に対するものである。繰り延べるという意味およびそもそもの仕訳の意味の理解は、学習経験が長いほど高くなっている。しかし、今年分と来年分の混同という点については学習経験にかかわらず多くの学生が困難を感じている。

問 18 再振替仕訳の理解および問 19 再振替の根拠についてのクロス集計は次のとおりである。カッコ内のパーセントはそれぞれの縦合計 466 人、19 人、22 人、83 人に対するものである。初学者で再振替仕訳を理解している率が 39%と低くなっている。これは再振替仕訳を授業で取り扱っていない場合があることと関連しているかもしれない。経験者の理解度は比較的高い。ただ、根拠を説明できる学生の比率は低く、2 年以上の学習経験を持つ学生でも 42%である。

	初学者	高校選択科目	高校必修1年間	高校必修２年以上
問18　再振替仕訳を理解している	181人（ 39%）	15人（ 79%）	15人（ 68%）	71人（ 86%）
問19　根拠を説明できる	86人（ 18%）	10人（ 53%）	6人（ 27%）	58人（ 70%）
合　計	466人（100%）	19人（100%）	22人（100%）	83人（100%）

以上のクロス集計から、次のことが明らかになった。

１．高校での学習経験が長いほど理解力の高まる項目
　　貸借対照表の理解、損益計算書の理解、仕訳・勘定記入規則
　　現金・預金取引、商品売買取引、有価証券取引、固定資産取引
　　貸倒引当金、有価証券の評価替え、減価償却、精算表
２．高校での学習経験にかかわらず理解力が低い項目
　　複式簿記の仕組み、利益計算の仕組み、帳簿の仕組み
　　その他の債権・債務取引
３．理解するまでに長期間かかる項目
　　為替手形取引、見越・繰延、財務諸表
４．大学指導者の意識と相違する結果が示された項目
　　売上原価の算定

ただし、統計的に有意な差があるかどうかの検証はこれからであるため、中間報告における上記の小括に変更が生じることもある。

（以上文責　千葉　啓司）

３．大学簿記教育初年度についての大学指導者へのアンケート

３．1．アンケート実施概要

「大学における簿記教育の問題点の整理と対策案の提示」というテーマの下、第１年度の作業として簿記の学習項目のどのような点に学習上の困難を感じているか、学生と教員の双方に対してアンケートを実施した。

以下では指導者側のアンケート結果をまとめ、学生アンケートとの共通事項については比較検討を行い、双方の意識の一致・不一致を確認した。また、教員独自のアンケートにおいては、現在どのような意識の下、簿記教育が行われているか、その方向性を探っている。アンケートは研究部会委員の

所属大学の教員を中心に依頼し、42 名から回答を得た。

第 1 年度の課題はまず、アンケートの結果から現在の簿記教育が抱えている問題点、とりわけ簿記の初学者に対する簿記教育の問題点を浮き彫りにすることであり、それを受けて第 2 年度は一つ一つの問題に理論的な裏付けを与えていくという作業に入る。最終的には研究部会として具体的な問題打開策を提示する試みを行う考えである。

３．２．アンケート結果とコメント

問１　42 件の学校の内、38 件は 4 年制大学、4 件が短期大学であった。

問２　学部としてはほとんどが経済・経営・商学部である。

少数派として農学部・総合政策・国際学部がある。

問３　(省略)

問４　資格試験を想定していない専門教育科目に簿記教育の主眼が置かれているもの が 21 件（約 45%）、資格試験の基礎として考えているものが 17 件（約 36%）、教養教育の一環として考えているものが 5 件(約 11%)。資格試験対策として考えているものが 3 件(約 6%)、その他が 1 件（約 2%）と続く。

これを見ると、半数以上の大学が大学教育の立場で簿記というものを捉えている。短大は 4 件のうち 3 件が資格試験対策という捉え方をしており、大学と別の簿記教育環境にあることが窺える。

また、教養教育として簿記を捉えている大学も 5 件あるが、これは興味深い。専門でもない、資格対策でもない、いわば第三の道があることが示されている。これは後の問 33 と通底する問題であり、回答者の一人からは「細かい仕訳よりも、前提となるビジネス実務や会計の知識を学んでほしい」とあり、仕訳にこだわる簿記教育一般へのアンチテーゼが示されている。

なお、教養教育として使われている教材は 2 件の回答があり、『テキスト初級簿記』（出版社不明）とプリント配布というものであった。

問５　資格を想定している大学では、やはり予想通り日商 3 級が 21 件で多い（約 60%）。次いで、日商 2 級 8 件（約 23%）。全経は合わせて 6 件（約 17%）。

問６　普通科出身の学生がほとんどである大学が約 86%、商業科出身の学生が結構多くいる大学が約 14%を占める。

問 7　商業科出身の学生が多くいる大学では彼らに対する対策をとっていない大学もあるが、対策をとっている大学では、「簿記検定試験合格歴でゼミナールを分ける」、「クラス分けを本人の希望で」、「上級クラスを設ける」、「レベル別クラス」、「講義よりも練習問題を重視」、「検定合格歴を考慮」、「全商合格者に単位認定」といった対策をとって配慮をしている。

人的に余裕のある大学ではクラス分けをして対処している姿が窺える。

問８　授業のタイプとしては、90 分の半期授業が 17 件（約 40%）で一番多く、次いで 90 分の通年授業の 14 件（約 33%）、90 分の半期で 30 回のタイプが 11 回（約 26%）という順である。

問 9　複数の教員で同一タイトルの簿記の授業を行っている場合、事前の打ち合わせはあるかないかについて、回答はほぼ二分される。

打ち合わせをしているという回答の内容は、「打ち合わせをするが、統一はしていない」と「打ち合わせをし、統一を図る」に分かれる。さらに後者は、シラバス・テキスト・テストのどこまでを統一化するのか、その組み合わせによって分かれている。

問 10　正規の授業外の簿記講座をおいていないのは 12 件（約 26%）。残りの大学は、次の講座をおいている（約 74%）。

会計研究室をおいているのが 2 件（約 4%）、日商講座をおいているのが 27 件（約 56%）、全経講座をおいているのが 3 件（約 6%）、税理士講座をおいているのが 11 件（約 23%）、公

認会計士講座をおいているのが5件（約10%）であった。日商試験を意識して講座をおいている大学が多いことが分かる。

また、単位認定はほとんどの大学でなく、ある場合は「日商2級で会計学入門の単位とする」、「1つの試験毎に2単位付与する」というものであった。

問11　（基礎編）では、難しいと思われる項目で

① 帳簿の仕組み（19件）
② 仕訳および勘定記入規則（15件）
③ 決算（14件）
④ 利益計算のしくみ（9件）
⑤ 複式簿記のしくみ（6件）
⑥ 貸借対照表の見方（1件）
⑥ 損益計算書の見方（1件）

最も難しいと思われる項目で

① 決算（13件）
② 仕訳および勘定記入規則（10件）
③ 複式簿記のしくみ（5件）
④ 帳簿の仕組み（3件）
⑤ 利益計算のしくみ（1件）

の順となった。

これを合算すると次のような順位（上位5位）になる。

① 決算（27件）
② 仕訳および勘定記入規則（25件）
③ 帳簿のしくみ（22件）
④ 複式簿記のしくみ（11件）
⑤ 利益計算のしくみ（10件）

この合算の結果を学生アンケートと対照させてみると次のようになる。

「決算」は共に1位の項目である。「仕訳および勘定記入規則」も共に2位の項目である。「帳簿のしくみ」も共に3位である。「複式簿記のしくみ」は教員側では4位であるが、学生側では5位である。「利益計算のしくみ」は教員側で5位であるが、学生側では4位となっている。

これを見ると、一部順位が入れ替わっているが、教員側の意識と学生側の意識はほぼ一致しているといってよいだろう。

次に（期中取引編）では、難しいと思われる項目で

① 商品売買取引（16件）
② 手形取引（12件）
③ 固定資産取引（7件）
④ その他の債権・債務取引（6件）
⑤ 現金・預金（小切手を含む）取引（3件）
⑥ 有価証券取引（1件）

最も難しいと思われる項目で

① 有価証券取引（19件）
② 手形取引（2件）
③ その他の債権・債務取引（3件）

の順となった。

これを合算すると次のような順位（上位3位）となった。

① 有価証券取引（20 件）
② 手形取引（14 件）
③ その他の債権・債務取引（9 件）

この合算の結果を学生アンケートと対照させてみると次のようになる。

「有価証券取引」は教員側で 1 位であるが、学生側では 3 位である。「手形取引」は教員側で 2 位であるが、学生側では 1 位である。「その他の債権・債務取引」は教員側で 3 位であるが、学生側では 1 位である。

これを見ると、期中取引については両者の若干の意識のずれが感じられる。

最後に（決算整理編）では、難しいと思われる項目で

① 売上原価の算定（19 件）
② 費用・収益の見越し・繰延べ（17 件）
③ 8 桁精算表（13 件）
④ 損益計算書・貸借対照表の作成（8 件）
⑤ 減価償却（7 件）
⑥ 貸倒引当金（6 件）
⑦ 有価証券の評価替え（4 件）
⑧ 引出金の整理（2 件）

最も難しいと思われる項目で

① 費用・収益の見越し・繰延べ（9 件）
② 売上原価の算定（8 件）
③ 8 桁精算表（6 件）
④ 貸倒引当金（2 件）

の順となった。

これを合算すると次のような順位（上位 4 位）になる。

① 売上原価の算定（27 件）
② 費用・収益の見越し・繰延べ（26 件）
③ 8 桁精算表（19 件）
④ 貸倒引当金（8 件）

この合算の結果を学生アンケートと対照させてみると次のようになる。「売上原価の算定」は教員側で 1 位であるが、学生側では最下位の 8 位である。「費用・収益の見越し・繰延べ」は教員側で 2 位であるが、学生側では 3 位である。「8 桁精算表」は教員側で 3 位であるが、学生側では 1 位である。「貸倒引当金」は教員側で 4 位であるが、学生側では 6 位である。

これを見ると顕著なのは売上原価の算定で、教員は学生が一番不得意であると考えているのに対して学生はそう考えていないという両者の意識のずれが見て取れる。

問 12 貸借対照表と損益計算書の有機的関係は、理解しているが 36 件（約 86%）、理解していないが 6 件（約 14%）ということで、約 14%の教員が学生は理解していないと考えている。

理解していない理由としては、「説明はするが十分な時間が取れない」、「各財務諸表を個別的にとらえ、繋がりを理解していない」、「貸借対照表に利益概念が出てくること自体が分かっていない」、「決算振替仕訳の理解が難しい」というもの。

問 13　取引の二面性を理解しているは 34 件（約 81%）、理解していないは 8 件（約 19%）である。

理解していない理由としては、「二面性があるということを知らない」、「難しい」、「学生により理解が違う」、「二面（という言葉）の理解をしていない」など。

問 14　簿記の 5 要素の位置関係は理解しているが 34 件（約 81%）、理解していない 8 件（約 19%）である。

理解していない理由としては、「復習をしないから」、「5 要素に分解することすら怪しい」、「現金取引と同じように考えようとするため」、「特に純資産」、「最初は理解していたが、勘定科目が増えてくると勘定との関係が曖昧になる」、「初期の段階で詳しく説明すると混乱するのでこの点については詳しく説明しない」となっている。

問 15　「資本」と「純資産」との言葉の違いを教員自身に聞いたものであるが、回答は以下のようなものである。

・授業では意識しない。
「資本」という用語は様々な意味があるため、用語を整理するためには良いと考えている。
・同義と考えている。
・両方の言葉の異同点について説明するようにしている。
・1 年生向けの簿記の授業では、意識していません。
・「純資産」では教えにくいと考えているため、基本的には、「資本」という言葉を使用しています。
・意識している。改悪。
・拠出資本等の資本概念とこれにこだわらない純資産のように別の概念と考えています。制度上の問題と捉えています。
・簿記の基礎教育では、一貫性を重視しているので「純資産」の用語を用いて、資産と負債の差額概念として教示している。2 級レベルで、その中身について触れるようにしている。
・以前の資本概念の方が説明しやすいように思います。
・意識している。
・資本と純資産の概念は明確に異なりますが、導入期にでは純資産という用語で統一しています。やはり、純資産の概念は、簿記論、日商 1 級レベルにならないと具体的勘定科目がでてこないので理解できないと思います。また、会計学の科目ではさわりだけを説明します。資本よりも純資産の方が妥当性はあると思います。ただし、簿記を学ぶ学生にとっては分かりにくいと考えられます。
・本質的には資本：調達源泉、純資産：資産と負債の単なる差額。
・簿記系では、すべて「純資産」と言い換えている。
会計系では、20 世紀型の伝統的（収益費用アプローチ）理論においては、「資本」を使うことがある。
・簿記では「資本」、会計では「純資産」と使い分けるよう心がけている。「純資産」は表示項目として教える。
・実質的（論理的）に同義と理解している。
両者を別の概念としているのは日本のローカルなルールであると考えている。
・株主資本と時価評価によるものと区別して説明している。
・意識する。指導しにくい。
・「資本」と「純資産」については簿記論ではなく、会計学の授業（演習）でその違いを説明している。

教員自身がこの問題について教育の現場で苦慮している姿が窺える。

一番多い意見は、簿記と会計の授業で用語を使い分けるというもの。しかし、簿記では「資本」、会計では「純資産」で説明する教員がいる一方、正反対に簿記では「純資産」、会計では「資本」で説明する教員がおり、指導上の混乱が見られる。

また、簿記の中でもレベルによって使い分けるという配慮も見られる。

現在、「資本」と「純資産」の 2 つの概念は明確に区別することなく使われており、特に簿記の初学者にとって分かりにくいものとなっている。

問16　仕訳と転記を理解しているは31件（約76%）、理解していないは10件（約24%）である。

理解していない理由は、「転記ができない」（2 件）、「転記を実践させる時間が少ない」「転記時に相手勘定を記入することで迷いが生じる学生が多いため」「元帳の記入が混乱している」「元帳の存在を知らない」「試算表の作成方法が間違えているため」「ほとんどの学生は理解せずに単に暗記するため」「仕訳がうまく理解している学生とそうでない者で違う」というもの。

問17　商品処理では、分記法から始め三分法に進むのが16件（約39%）、三分法だけ学ぶのが17件（約41%）、その他が8件（約20%）である。

その他の内容としては「三分法は商品、分記法は有価証券とする」、「三分法と売上原価対立法を学ぶ方が良い」、「分記法→総記法→三分法→売上原価対立法、がよい」、「三分法からはじめ分記法に進む」（3 件）である。

学生アンケートでは、分記法の方が分かりやすいが 26%、三分法の方が分かりやすいが74%となっている。

問18　三分法の決算整理仕訳としては、繰り返し類題を解かせるが4件（約10%）、仕訳の根拠を理解させるが15件（約36%）、その両方を行うが23件（約55%）である。根拠と類題演習を行っているのが過半数であり、このテーマにかなり力を入れていることが窺える。

問19　分記法では商品は資産、三分法では仕入は費用となることに学生が理解しているかについての回答。

理解しているが26件（約63%）、理解していないが15件（約37%）である。

理解していない理由としては、「仕入は仕訳帳との関係の勘定である」、「分記法を扱わないから」、「正確に言えばその理解は要求していない。売上原価と在庫の区別ができれば良いから」、「なれると理解する」、「仕入勘定における売上原価の算定仕訳はパターンとして覚えているため」、「資産（商品）勘定と仕入勘定が区別されていない」、「仕入は費用というのは正しくないので」、「理由を教えていない気がする」、「理解していない学生は最後まで分類できない」というもの。

問20　仕入勘定に原則として付随費用を算入することを学生が理解しているかについての回答。

理解しているが33件（約65%）、理解していないが8件（約35%）である。

理解していない理由としては、「学習計画の都合上教えていない」、「付随費用のうちどれを入れてよいか迷っているケースが見られる」、「多くの場合、支払運賃勘定を使用し、売上原価とする意識が全くないため」、「何が付随費用であるか判断できないから」、「仕入時には仕入勘定に加えるが、売上時には発送費などの勘定で処理するので、統一性がないように思い、理解できない」、「仕訳では算入している。しかし、商品有高帳を作成させると算入していないことが多い」というもの。

学生アンケートでは、「知っていた」が80%、「知らなかった」が20%となっており、教員側と若干のパーセンテージのずれはあるが、意識が一致しているといえるであろう。

問21　約束手形についての回答。

約束手形の意味が理解しづらいとしたものが12件（約29%）。

約束手形であるのに支払手形・受取手形で処理する点が理解しづらいとしたものが一番多く18件（約44%）。次いで、約束手形の意味が理解しづらいとしたものが12件（約29%）。振 出という用語が小切手と同じで間違われやすいとしたものが7件（約17%）、その他が4件（約10%）と続く。

学生アンケートでもこれと同じ順位となっており、教員側と学生側の意識がぴったり一致している。

問22　為替手形についての回答。

どの商店が振出人、受取人、引受人なのか分かりにくいが一番多く27件（約23%）。次い

で、文章が複雑で、問題文から取引を理解しにくいが 25 件（約 22%）。為替手形の意味が理解しづらいが 22 件（約 19%）。為替手形を振り出した商店が支払手形・受取手形勘定を使わないが 15 件（約 13%）、為替手形であるのに支払手形・受取手形で処理する点が理解しづらいが 12 件（10%）、約束手形との違いが分からないが 8 件（約 7%）、その他が 6 件（約 5%）と続く。

その他の意見としては「理解しづらくないように工夫して教えているので大丈夫だと思う」、「自己指図手形、自己宛手形になるとさらに理解が難しくなるようです」、「為替手形振り出しの前提となる売掛金の存在が理解できない」となっている。

問 23　費用・収益の見越し・繰延べにおける決算整理仕訳についての回答。

繰延べるという意味が理解できないのが一番多く 19 件（約 49%）。

次いで、そもそもこの仕訳の意味が理解できないが 11 件（約 28%）。

その他が 9 件（約 23%）。

その他の意見としては、「特に理解しにくいということはない」、「収益費用がイメージしづらい」、「今年の分か区別させるところ」、「4 パターンあるのでよけいに判断。理解しにくい」、「利息の月割計算、経過期間の把握が苦手である」「それほど苦しまないようです」「やはり終盤なのでみんながついてきているわけでなく、ついてこられなかった学生は全く理解できない」というもの。

学生アンケート（注：学生側は質問が 1 つ多い）でもほぼ同様の順位の回答が得られており、両者の意識はほぼ一致しているといえるであろう。

問 24　再振替仕訳について、なぜこの仕訳が必要であるか理解できないが 25 件（約 74%）。その他が 9 件（約 26%）。

その他の意見としては、「特に理解しにくいということはない」、「問 23 と一体の問題である」、「売上原価は期末に同時に行うのにこの項目は期首に単独に行うため」、「解説の時点では理解しているが、すぐに忘れる」、「本当は全体の流れを当期と次期でシミュレーションできればもう少し理解ができると思うのですが、コマ数的に時間が足りない」というもの。

学生アンケートでは、知っていたが 282 名、知らなかったが 283 名であり、半分の学生は理解し、半分の学生は理解していないという結果となっている。

問 25　授業形式についての回答。

黒板（ホワイト・ボード）教室での板書形式が 32 件（約 78%）。

パワーポイントが 6 件（約 15%）。

パソコン教室という回答はなし。

併用するという回答は 3 件（約 7%）。

これを見るに現在でも従来型の黒板教室を使用している教員が多数を占めていることが分かる。

問 26　課題（宿題）についての回答。

学生に宿題を出すが 16 件（約 38%）。出さないが 26 件（約 62%）。

出す理由は大半が授業の補足、復習させるためという回答である。

問 27　簿記の使用テキストについての回答。

- 『企業簿記の基礎』中央経済社
- 『テキスト初級簿記』（2 件）
- 『TAC のテキスト・トレーニング』
- 『一から分かる会計』
- 『合格テキスト日商簿記 3 級第 6 版』TAC 出版
- 『エッセンス簿記会計』森山書店

・『会計学・簿記入門』白桃書房
・『大原のテキスト』
・『スッキリわかる日商簿記３級・２級』TAC 出版
・『日商簿記ワークブック２級・１級』中央経済社
・『新訂現代簿記』中村忠、白桃書房
・『TAC の３級テキスト』
・『簿記基本論テキスト』大橋信定、創世社
・『サクッと受かる日商３級商業簿記テキスト』ネットスクール
・『要点整理日商簿記検定３級』ほうれい出版
・『企業簿記の原理』中央経済社

使用テキストはおよそ専門家によるものと専門学校の出版したものに二分されている。

テキスト以外では教員がプリントを作成している場合もある。プリントはテキストの代替という位置づけとテキストの補助という２つのパターンがある。

問 28　当該テキストを使用する理由としては、「初学者にとってわかりやすい」、「課外講座と連携して授業を展開するため」、「説明・問題ともにボリュームがある」、「上司の著書のため（後略）」、「執筆しているため」（複数）、「読みやすい」（複数）、「安価」、「簿記検定対策」、「イラスト（図表）があり使いやすい」（複数）、「簿記の基本を網羅」、「簿記と会計を統合しているから」、「過去問は洗練されているから」などである。

問 29　テキストに満足しているかについては、「満足している」（複数）、「概ね満足している」（複数）、「用語を整理するためには良い」、「70%（の満足度）」、「ほぼ満足しているが著者と意見が合わない部分もある」、「レジュメ中心の授業で、テキストは参考程度のため、特に不都合はない」、「解法がテクニックに走っているため、あまり満足していない」、「いいえ」、「学生が使いこなせないのがデメリット。内容的には満足している」、「満足がいかないところや不十分なところは別途レジュメを配っている」というもの。

問 30　これまでの日本における簿記教育に対する教員の考えを聞いているが、以下のような回答が出された。

・最近はそうでなくなったが、帳簿組織の教育はあまり意味がないと思う。
複式簿記のしくみを理解させることに重点をおくべきであると思う。

・実務における処理と異なる部分が多い。
三分法や精算表は一定規模の企業では使っていない。
特殊商品販売も実務ではほとんどない。

・もちろん、教員が大学によるが（原文のママ）、相対的に、大学よりも専門学校の方が優れていると思う。

・現行の実務との乖離部分の調整。実態とある程度合わせることが、実践性の高い『簿記』という科目の性質上ある程度不可欠ではないだろうか。日商検定等の出題内容等にも検討の余地があるようにも思う。

・やはり簿記教育は集中的に授業を組むことがよいと思います。
１週間で１回の授業であると前のことを忘れてしまします。

・本来の簿記学という学問ではなく、検定試験中心の講義になっていることの懸念。
会社設立から決算までをシュミレーションした指導方法を試みたいとつねづね感じている。
どのテキストも内容的には変わらないが、従来の内容の順番が本当に学生にとって理解しやすいか疑問である。
学生に興味をもって欲しいとつねづね思っているが、なかなか全員に興味をもってもらうことは難しい。全員に興味をもってもらうことが私の課題です。

・会計ソフトを使った教育をできればと思っているが…。
会計のIT化にある程度歩調をあわせるべきではないだろうか。
・基本処理に特化して簡易にする方がよい。
・実務との乖離をどう説明した上で手記簿記を教えていくのか?
・あまりにも画一的な回答を求める体系（検定試験）ができあがってしまっている。
仕訳の裏にある取引を理解することに重点を置く教育ができればと思っています。
・普通高校でも基本を教える必要がある。
・中学校から開始すべきです。
・世界でも第一級の簿記教育が行われている。
複式簿記をベースとした会計学教育が貫徹している点では、米国、IFASの基準形成アプローチとは対照的である。

実務との乖離を指摘する意見が複数ある。ほとんどのテキストが旧態依然とした内容によって書かれており、今後一つ一つの項目をチェックする必要があるかもしれない。現在行われていない取引を項目として取り上げることには問題がある。荷為替手形（またそれを前提とした割引）などはよく引き合いに出される項目である。

また、これは重要な点であると考えるが、検定試験にひきずられた授業になっている傾向があり、どこまで「簿記学」の観点から授業を行うかが問題となろう。

問31　「簿記離れ」という言葉に対する教員の持つイメージ。

・「簿記離れ」の現状があると思う。
これを前提に、簿記の人生における重要性を学生に教えることが重要であると思う。
・簿記検定の受験者からすると、簿記離れは大きく生じていないように思われる。
・世間一般に言われるほど感じない。
・「簿記離れ」の前の状況を詳しく知らないが、他の科目から推察するに、「簿記だけ」が殊更に敬遠されているわけではないように思います。他の科目についても、習得に時間がかかるものについては、同様に「離れ」が進行しているのではないでしょうか。
・そもそもそのような言葉を聞かない。
・特にありません。
・パソコンソフトの存在で地道に簿記を学ぶ必要性に?をもたれるのではないか。ただ面倒くさいことは敬遠する風潮など。
・会計の基礎ですのできちっと教えることがよい結果となります。
・資格に興味があって、最初、やる気がある学生がみられるのですが、簿記の学習を始めると挫折するケースが多くみられます。これは、ある意味センスの問題とも受けとめています。簿記離れというより、センスの有無によって、センスのある学生が日商2級以上を目指し、本格的に公認会計士、税理士、日商1級にチャレンジする傾向があります。また、商業高校出身の学生は機械的に学習していたので、大学に入学して、その先の資格にチャレンジすることが困難なケースが非常に多いと思われます。
・会計のデジタル化（IT化）により、企業の会計担当者に対する需要が減っていることから、「簿記に関心のある生徒（学生）」が減るのはむしろ必然と思う。社会環境の変化（少子化）に伴うことであるから、過敏に反応する必要もないと考える。
・大学でときどき感じます。
・教員の「簿記離れ」が今後、問題となってくるのではないか?
手記簿記から離れていくこともあるのでは?帳簿が「データベース」となった場合にはどんな変化があるか?
・特に感想はありません。

・心配している。
・気にはなりません。
・現実に「簿記離れ」が起きているとしたら、大学側のカリキュラム編成に全ての責任がある。簿記を例えば経営学や商学のような科目と同じスタンスで教育してはいけない。「強いて努めさせる」（勉強）姿勢がこの科目には（数学と同様）不可欠である。

「簿記離れ」という言葉はかつて簿記学会の共通テーマにも使われた言葉ではあるが、この言葉が「独り歩き」をした言葉である感もあり、それが故にか何も感想をもたない教員が散見される。

一方、コメントを寄せた教員の回答を見るに、今日のIT社会における簿記の立ち位置が揺らいでおり、従来型の簿記（学習）が意味を失うのではないかとの懸念が示されている。

問32　学生の簿記の理解を妨げているものは何かへの回答。

・簿記は数学などと同様に学習の順序およびその理解が重要であるが、ある段階でわからなくなるとその先が理解できないというところに簿記の学問的性格および理解の妨げがあると思う。
・前述したように実務では必要ないが難しい処理を教えるのが一般的となっていること。
・面倒な手続き。
・実際の取引を知らずに学習していること。
・最近の学生の傾向で、それを学ぶことによりキャリア的なメリットなどが分からない点。会計士や税理士挑戦者はともかく、就活などに際してはたしてそれがどれだけ実際上必要か？有利か？について？？？であること。有利であるとなればおのずと学生は増える。
・学生の興味のある職種を例にして授業をするとよい。
・会社での取引が身近なものではないため、イメージがしづらいのではないか。
そのために、理解に差が出てしまうように感じる。
・やはり、大学では簿記だけとはいかないため、簿記にあてる時間が少なくなります。また、本格的職業会計人を目指している学生はモチベーションが高いため、自分で時間をつくってやっています。ただ、1年間で、3級の範囲を終わらせるとなると夏休みの期間がネックで、その間に学生の知識が白紙になります。その点が、いつも指導していく上での悩みです。
・借方、貸方という言葉がとかくわかりづらい。
決算仕訳の存在。
・特異な思考を理解するより、慣れる方が良いという教え方。
・学生の想像力の低下。教員の理解度の低下。検定試験の自己目的化。
・簿記は専門家が身につけるものというイメージができあがってしまっていること。
・仕訳の二元的な考え方と数学との違い。
・仕訳。
・上述した教育サイドの問題。

種々の意見が出されているが、いくつかある意見は実際の取引を知らないことから簿記学習上の壁があるというもの。しかも実務では必要とされない取引が出てくるという点。また、決算仕訳を含む仕訳の問題。「簿記は仕訳なり」という言葉があるが、仕訳を理解しないことにはいつまでも簿記を理解したことにはならないのである。

問33　簿記教育を通じて学生に身に付けて欲しいことへの回答。

・簿記教育だけでなく、学問一般についていえることであるが、物事に対する論理的思考を身に付けてほしい。
・細かい仕訳よりも、前提となるビジネス実務や会計の知識を学んでほしい。
・数字に対する関心。

・社会の中で簿記（あるいは会計）が果たしている役割について理解すること。
会計専門職を志望する学生に対しては、会計学の専門的な学習の土台として、簿記の基本をしっかり理解してほしいと考えている。
・経済社会や企業取引への関心が乏しいこと。
・ビジネスセンス。
・経済活動の付随する金銭の動きとこれをマネジメントする必要性と方法。
・企業経営のバランス感覚と経営に際する会計情報の有用性。
・会計の基礎として知ってもらいたい。
・会社でどのような取引が行われているか知って欲しい。
検定試験に挑戦する過程で、地道に努力することの大切さを知って欲しい。
・簿記は実社会においていろいろなことを教えてくれます。したがって、検定試験が先行している傾向がありますが、小切手、手形、債権・債務、有価証券などの基礎的な仕組みを理解してもらいたいと思います。必ず社会で役に立つはずです。
・考える力。
・複式思考。
・計数感覚、会社の見方、自分のお金の使い方・貯め方など。記録の大切さ。
・利益の測定システムであることを認識してほしいこと。
・企業社会のインフラ知識（tool）としての認識をもってほしい。
・企業の経済活動の本質（二重性の原理）を忠実に表現した測定・計算思考。
それを通じた合理的な世界認識の方法。
・基礎学力。特に計数。
・売上高・利益などの意味。ビジネスマインドとして。
・簿記を通じた会計に対する見方、考え方の理解。
・企業経営のセンス。経済活動への関心。
・単に記帳技術を覚えるのではなく、その背後にある考え方を学んで欲しい。
・会社の規模・業績に関わらず、経理の役割が重要であるということ。
・取引の二面性をとらえて、複式簿記で記帳する技術を身に付けることで物事は常に「原因」と「結果」の二面が存在しており、そこに着目する習慣から問題の解決策を見出したり、未来を予測したりすることに役立つと思われる。
・数字に関する関心。

ここには様々な意見が表出されており、簿記教育のもつ多義性が示されているといえる。

（以上文責　李　精）

資料

１．学生に対するアンケート

アンケート趣旨

大学生が、１年次における簿記教育において、特に簿記の学習項目のどのような点に学習上の困難を感じているかを調査することを主眼とする。人的な要因あるいは教育方法による差異を中和化するために、複数の大学においてアンケートを実施する。同時に、教員の側で、簿記教育上どのような指導項目においてどのような困難が感じられているかを調査し、大学生の意識との一致・不一致を確認する。また、高校時代における簿記学習の有無と、学生の意識に何らかの関連があるかどうかをも分析する。こうしたアンケート分析は 2002 年に最終報告された柴健次氏を部会長とする日本簿記学会簿記教育部会にも見られる。本研究部会はこの先行研究を受けて、さらに教員及び大学生共に困難であると認識している簿記の学習項目につき、理論的な裏付けのもと具体的ないくつかの打開策を提示しようと試みるものである。

「大学簿記教育初年度における学生の意識調査アンケート」

教員記入欄

大学・短大名	
学部・学科名	
記入者名	

Ⅰ．これまでの簿記学習について

問１　大学に入るまで簿記の勉強をどの程度してきましたか。

１．大学に入るまで簿記の勉強をしたことがない。
２．高校の時に選択科目として勉強した。
３．高校の時に必修科目として１年間だけ勉強した。
４．高校の時に必修科目を中心として２年以上勉強した。

問２　簿記の勉強はどのようにしていますか。

１．簿記処理の理由から考えて勉強する。
２．問題をたくさん解いてできるようにする。
３．その他（具体的に：　　）

問３　簿記に関してどのような資格を持っていますか（複数回答可）。それぞれ最上級の資格のみ記入してください。（取得時は高校時代の場合は学年を記入し、大学入学後の場合は大学入学後に○をつけてください。）

１．　持っていない
２．　全商　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）
３．　全経　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）
４．　日商　　級　（取得時:高校　　年、　大学入学後）

問４　資格取得は簿記学習の動機付けになると思いますか。

１．　は　い　　２．いいえ

Ⅱ．簿記学習において難しいと思う点について

ステップ１

（基礎編）

問５　簿記学習において、難しかったと思う項目に〇をつけて下さい。その中でも最も難しかったと思うもの１つに◎をつけて下さい。

（　）１　複式簿記の仕組み
（　）２　貸借対照表の見方（資産、負債、純資産の意味）
（　）３　損益計算書の見方（収益、費用の意味）
（　）４　利益計算の仕組み
（　）５　仕訳および勘定記入規則
（　）６　帳簿の仕組み
（　）７　決算

（期中取引編）

問６　簿記学習において、難しかったと思う項目に〇をつけて下さい（複数選択可）。その中でも最も難しかったと考えるもの１つに◎をつけて下さい。また、〇または◎をつけた項目についてその理由を㋐㋑㋒の中から選んでください（複数選択可）。

（　）１　現金・預金（小切手を含む）取引
　　難しいと思った理由は何ですか。
　　（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった
　　（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった
　　（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　）２　商品売買取引
　　難しいと思った理由は何ですか。
　　（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった
　　（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった
　　（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　）３　手形取引
　　難しいと思った理由は何ですか。
　　（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった
　　（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった
　　（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　）４　有価証券取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　）５　固定資産取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

（　）６　その他の債権・債務取引

難しいと思った理由は何ですか。

（　）ⓐ　取引の仕組みが難しかった

（　）ⓑ　仕訳の意味がよく分からなかった

（　）ⓒ　計算の仕方がよく分からなかった

(決算整理編)

問７　簿記学習において、難しかったと思う項目に〇をつけて下さい（複数選択可）。その中でも最も難しかったと思うもの１つに◎をつけて下さい。

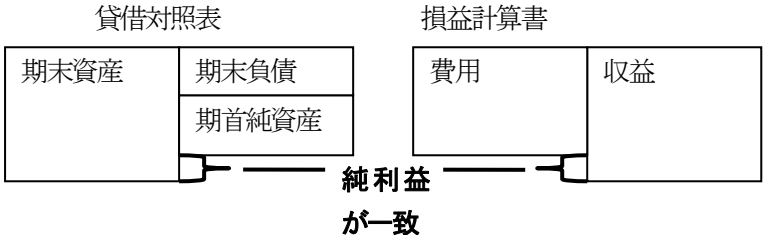
（　）１　売上原価の算定
（　）２　貸倒引当金
（　）３　有価証券の評価替え
（　）４　減価償却
（　）５　費用・収益の見越・繰延
（　）６　引出金の整理
（　）７　８桁精算表
（　）８　損益計算書・貸借対照表の作成

ステップ２

(基礎編)

問８　貸借対照表と損益計算書に関する下記の仕組みを理解していますか？

１．理解している。　　２．理解していない。



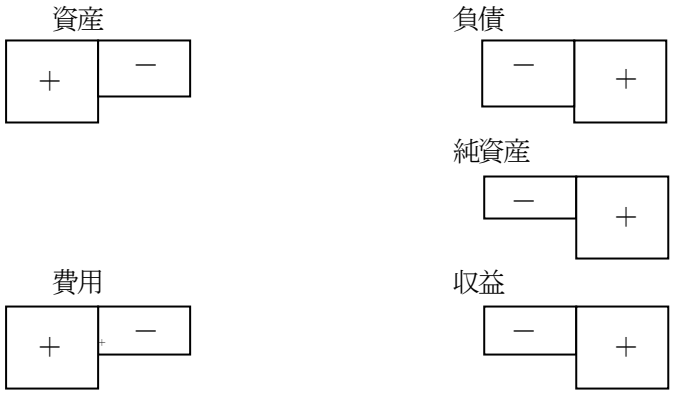
問９　問８で理解していないと答えた人は、特にどこが分からなかったのですか。具体的に書いて下さい。

問 10　帳簿価額￥10,000 の有価証券を￥12,000 で売却し、代金を現金で受け取ったという取引は、次のように分解できます。

１．現金（資産）￥12,000 の増加
２．有価証券（資産）￥10,000 の減少
３．売却益（収益）￥2,000 の発生

分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

問 11　勘定記入のルールは次のようになります。



分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

問 12　次の仕訳は下記の通りの勘定記入となります。

仕訳　4/1　（借）現　金　　80,000（貸）有価証券 100,000
　　有価証券売却損　20,000

勘定

現　金

4/1	有価証券	80,000	

有価証券

		4/1	諸口　100,000

有価証券売却損

4/1	有価証券	20,000	

分かりづらい点はどこですか。具体的に書いて下さい。

（期中取引編）

商品売買取引

問 13　次の取引は分記法と三分法でそれぞれ下記のような仕訳となります。

①当社は１個￥1,000 の商品を 10 個掛で仕入れた。

②当社は、上記商品のうち８個を１個￥1,500 で掛け売りした。

分記法

①（借）商品 10,000（貸）買掛金 10,000

②（借）売掛金 12,000（貸）商品 8,000

商品販売益 4,000

三分法

①（借）仕入　10,000（貸）買掛金 10,000

②（借）売掛金 12,000（貸）　売　上 12,000

分記法と三分法のどちらが理解しやすいですか。

１　分記法　　２　三分法

問 14　次の取引は下記のような仕訳となります。

当社は、商品￥100,000 を掛で仕入れ、引取運賃￥10,000 は現金で支払った。

（借）　仕　入 110,000（貸）買掛金 100,000

現　金　10,000

正解の仕訳を知っていましたか。

１．知っていた。　　２．知らなかった。

手形取引

問 15　次の取引について、各商店の仕訳は次のようになります。

10 月 1 日、東京商店は、大阪商店から商品￥100,000 を仕入れ、代金の支払として、支払期日 12 月 1 日の約束手形￥100,000 を振り出して大阪商店に渡した。

東京商店

（借）仕　　入 100,000（貸）支払手形 100,000

大阪商店

（借）受取手形 100,000（貸）売　　上 100,000

これらの仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　）１　約束手形の仕組み

（　）２　約束手形なのに支払手形とか受取手形と仕訳する点

（　）３　振出という用語が小切手と同じで間違いやすい

（　）４　その他（具体的に　　）

問16　次の取引について各店の仕訳は以下のようになります。

名古屋商店は、福岡商店に対する買掛金￥200,000 の支払のため、売掛金￥500,000 のある仙台商店の引き受けを得て、同店宛ての為替手形￥200,000 を振り出し、福岡商店に渡した。

名古屋商店（振出人）

（借）買掛金 200,000（貸）売掛金 200,000

福岡商店（受取人）

（借）受取手形 200,000（貸）売掛金 200,000

仙台商店（引受人、支払人、名宛人）

（借）買掛金 200,000（貸）支払手形 200,000

これらの仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　）1　為替手形の仕組み
（　）2　取引が複雑で、どの商店が振出人、受取人、引受人なのかわかりにくい
（　）3　為替手形なのに支払手形とか受取手形という勘定を用いる
（　）4　為替手形を振り出した商店が支払手形とか受取手形という勘定を使わない。
（　）5　その他（具体的に：　　）

（決算整理編）

問17　次のような場合、以下のような決算整理仕訳が必要となります。

当社は 10 月 1 日に向こう 1 年分の保険料￥120,000 を現金で支払っていたが、本日 12 月 31 日に決算を迎え、次年度分を繰り延べることとした。

（借）前払保険料 90,000（貸）保険料 90,000

この仕訳の分かりづらい点は次のどれですか（複数回答可）。

（　）1　繰り延べるという意味がよく分からない
（　）2　今年の３ヶ月分と来年の９ヶ月分のどちらで仕訳するのか混乱する
（　）3　そもそも何でこの仕訳をするのか意味が分からない。
（　）4　その他（具体的に：　　）

問18　問17 の設問の翌年１月１日には次のような仕訳が必要になります。

（借）保険料 90,000（貸）前払保険料 90,000

この仕訳が必要であることを知っていましたか。

1　知っていた　　2　知らなかった

問19　問18 における仕訳がなぜ必要なのか、説明できますか。

1　できる　　2　できない

アンケートは以上です。
ご協力ありがとうございました。

2. 指導者に対するアンケート

簿記担当者各位

日本簿記学会平成 24・25 年度
簿記教育研究部会　部会長
千葉商科大学　千　葉　啓　司

「大学簿記教育初年度についての大学指導者へのアンケート」のお願いについて

拝啓　時下、先生方におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、日本簿記学会におきまして平成 24・25 年度簿記教育研究部会が「大学における簿記教育の問題点の整理と対策案の提示」というテーマで立ち上げられました。

当研究部会は、大学指導者が 1 年次における簿記教育において、特に簿記の指導項目のどのような点に指導上の困難を感じているかを調査することを主眼としたアンケートを企画いたしました。

つきましては、先生方にアンケートにお答えいただきたく、ここにお願い申し上げます。

アンケート結果につきましては、日本簿記学会における当研究部会の研究目的以外に使用することはございません。

諸事でお忙しいこととは存じますがなにとぞ趣旨をご理解いただきご協力を賜りたくお願い申し上げます。

敬具

アンケート趣旨

大学指導者が、1 年次における簿記教育において、特に簿記の指導項目のどのような点に指導上の困難を感じているのかを調査することを主眼とする。人的な要因あるいは教育方法による差異を中和化するために、複数の大学においてアンケートを実施する。同時に、学生の側で、どのような学習項目においてどのような困難を感じているかを調査し、指導者との意識との一致・不一致を確認する。こうしたアンケート分析は 2002 年に最終報告された柴健次氏を部会長とする日本簿記学会簿記教育部会にも見られる。本研究部会はこの先行研究を受けて、さらに教員及び大学生共に困難であると認識している簿記の学習項目につき、理論的な裏付けのもと具体的ないくつかの打開策を提示しようと試みるものである。

＜アンケート実施にあたってのお願い＞

1．回答の締め切り日は平成 25　年 4 月 20 日（土）とさせていただきます。

「大学簿記教育初年度についての大学指導者へのアンケート」

Ⅰ．基本質問

問1　先生の所属する大学は次のどちらですか。

1．4 年制大学

2．短期大学

問2　所属する学部・学科を教えてください。

（　　）学部（　　）学科

問3　簿記・会計関連の担当科目を教えてください。

事項 科目名	対象学年	必修 or 選択	クラス数	1クラスの人数
①	年	必修・選択		約　　人
②	年	必修・選択		約　　人
③	年	必修・選択		約　　人
④	年	必修・選択		約　　人
⑤	年	必修・選択		約　　人
⑥	年	必修・選択		約　　人
⑦	年	必修・選択		約　　人
⑧	年	必修・選択		約　　人

※「選択必修」がある場合は必修に○をつけてください。

問4　簿記教育の主眼をどこに置いていますか。

1．資格試験の基礎として
2．資格試験対策として
3．教養教育の一環として
4．専門教育として（資格試験は想定していない）
5．その他（　　）

問5　問4の1または2と答えた場合、どのような資格を想定していますか。

1．日商3級
2．日商2級
3．全経4級
4．全経3級
5．全経2級
6．その他（　　）

問6　対象の学生はどのような高校出身の学生が多いですか。

1．ほとんどが普通科出身の学生
2．商業科出身の学生が結構いる
3．その他（　　）

問7　問6の2と答えた場合、商業科出身の学生向けに何か対策をしていますか。

1．特に何もしていない
2．対策をとっている→どのような対策をとっていますか。
（　　）

問8　授業時間、回数はどのようになっていますか。

1．90分・30回（週1回通年）
2．90分・30回（週2回半期）
3．90分・15回（週1回半期）
4．その他（　　）

問9　複数の教員で同一タイトルの簿記の授業を行っている場合、事前に打ち合わせ
(内容の統一や使用するテキスト等) をしていますか。
(　　)

問10　大学には正規の授業以外に簿記講座はありますか。
1．ない
2．ある→①会計研究室
②日商
③全経
④税理士
⑤公認会計士
→単位認定はありますか。
(　　)

Ⅱ．授業内容についての質問

【ステップ1】

問11　学生が、理解するのに難しいと思われる項目に○をつけてください（また、それぞれの編において最も難しいと思われる項目の１つに◎をつけてください)。

(基礎編)
(　) 1　複式簿記のしくみ
(　) 2　貸借対照表の見方
(　) 3　損益計算書の見方
(　) 4　利益計算のしくみ
(　) 5　仕訳および勘定記入規則
(　) 6　帳簿の仕組み
(　) 7　決算

(期中取引編)
(　) 1　現金・預金（小切手を含む）取引
(　) 2　商品売買取引
(　) 3　手形取引
(　) 4　有価証券取引
(　) 5　固定資産取引
(　) 6　その他の債権・債務取引

(決算整理編)
(　) 1　売上原価の算定
(　) 2　貸倒引当金
(　) 3　有価証券の評価替え
(　) 4　減価償却
(　) 5　費用・収益の見越し・繰延べ
(　) 6　引出金の整理
(　) 7　８桁精算表
(　) 8　損益計算書・貸借対照表の作成

【ステップ２】

（基礎編）

問12　学生は貸借対照表と損益計算書の関係（純利益を通じて繋がっている）を理解していますか。

１．理解している

２．理解していない

（理由：　　）

問13　学生は取引の二面性を理解していますか。

１．理解している

２．理解していない

（理由：　　）

問14　勘定記入、仕訳の規則

学生は簿記の５要素（資産・負債・純資産・収益・費用）の＋・－の位置関係を理解していますか。

１．理解している

２．理解していない

（理由：　　）

問15　先生は「資本」と「純資産」の言葉の違いを意識されていますか。

また、現在「純資産」となったことをどのようにお考えですか。

問16　仕訳と転記

学生は仕訳と転記を理解していますか。

１．理解している

２．理解していない

（理由：　　）

（期中取引編）

１．商品売買取引

問17　指導する場合、どのように進めるのがよいとお考えですか。

（　）１　分記法から始め、三分法に進む

（　）２　三分法だけを学ぶ

（　）３　その他（　　）

問18　三分法の決算整理仕訳として

（借）繰越商品　××　　（貸）仕入　××

を行いますが、この仕訳を理解させるためにとっている方法はどれですか。

（　）１　繰り返し類題を解かせる

（　）２　仕訳の根拠を理解させる

（　）３　仕訳の根拠を理解させた上で繰り返し類題を解かせる

問19　分記法では商品は資産、三分法では仕入は費用ですが、学生はこれを理解していますか。

1．理解している

2．理解していない

（理由：　　）

問20　仕入勘定に付随費用を原則として算入しますが、学生はこれを理解していますか。

1．理解している

2．理解していない

（理由：　　）

2．手形取引

問21　約束手形について、どの点が学生にとって理解しづらいと思われますか（複数回答可）。

（　　）1　約束手形の意味

（　　）2　約束手形であるのに支払手形・受取手形で処理する点

（　　）3　振出という用語が小切手と同じで間違われやすい

（　　）4　その他（　　）

問22　為替手形について、どの点が学生にとって理解しづらいと思われますか（複数回答可）。

（　　）1　為替手形の意味

（　　）2　文章が複雑で、問題文から取引を理解しにくい

（　　）3　為替手形であるのに支払手形・受取手形で処理する点

（　　）4　約束手形との違いが分からない

（　　）5　為替手形を振り出した商店が支払手形・受取手形勘定を使わない

（　　）6　どの商店が振出人、受取人、引受人なのか分かりにくい

（　　）7　その他（　　）

3．決算整理

問23　費用・収益の見越し・繰延べにおいて決算整理仕訳を行いますが、この仕訳について学生にとって分かりづらい点はどれですか（複数回答可）。

（　　）1　繰延べるという意味が理解できない

（　　）2　そもそもこの仕訳の意味が理解できない

（　　）3　その他（　　）

問24　次年度期首の再振替仕訳について学生にとってわかりづらい点はどれですか。

（　　）1　なぜこの仕訳が必要であるか理解できない

（　　）2　その他（　　）

Ⅲ．教育方法についての質問

問25　授業形式はどれですか。

1．黒板（またはホワイト・ボード）教室での板書形式

2．パワーポイント

3．パソコン教室

4．その他（　　）

問26　学生に時間外での課題（宿題）を出しますか。

1．出さない

2．出す

（理由：　　）

問27　使われているテキストは何ですか。

（　　）

問28　そのテキストを使われている理由は何でしょうか。

（　　）

問28　使用されているテキストに満足されていますか。

（　　）

問30　これまでの日本における簿記教育に何かお考えはありますか。

問31　最近、「簿記離れ」という言葉がよく使われますが、この言葉についてどのように思われますか。

問32　何が学生の簿記への理解を妨げているとお考えですか

問33　簿記教育を通じて学生に何を身に付けて欲しいとお考えですか。